
キツネとイタチのハーレムルート

夜未

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キツネとイタチのハーレムルート

【Nコード】

N4444BA

【作者名】

夜未

【あらすじ】

「俺と」「オレの」「ハーレムへの物語だ（や）！」「」
という残念な二人の男の異世界TS転生物語です。
見方によってはGLになります。

でも主人公たちは心は男です！↑ココ重要

どん亀更新です、多分。

俺の人生エピソード（前書き）

一人目の主人公。

俺の人生エピソード

俺はキツネを助けて死んだ。

俺の親友は主人公だった。

いや、実際どうだかは知らないがゲームでよくあるハーレムを素で形成していたのだ。

ゲームで言う俺はおそらくソイツの親友ポジションのキャラで、たまに相談や雑談、遊びに行くときに付き合うくらいの関係だった。まあ、つまりは脇役だな。うん。

俺は所詮脇役なのだ。

ある日、俺はソイツから恋愛相談を受けた。

普通なら流せるような相談だったが、ソイツの相手が最悪だった。

俺の好きな人だったのだ。

なぜ？ハーレム要員で良くないか？

修羅場の後始末はいつも俺がしているんだぞ？

そのうえ好きな人まで奪うのか？

俺は適当に流していたが、ソイツと彼女の関係は発展していく。

補正か？補正なのか？

そしてとうとう、ヤツと彼女は付き合い始めた。

俺をヘタレだと笑うがいい。

ただ見ているだけだったからな。

だが言い訳はさせてくれ。

なぜか動けなかった。まるで世界がヤツと彼女をくつつけるように動いているように。

それからの日々は思い出したくもない。

そんな最悪な毎日が続いたある日。

俺は道路の真ん中で水たまりの水を飲んでる一匹の狐を見つけた。
狐には乗用車が迫っている。

狐は動かない。

気づかないのか？

ヤバイ！助けないと・・・

行くのか？死ぬぞ？

死？

別に いいんじゃないか？

俺は走り出し、その勢いのまま狐を軽く蹴り飛ばして
意識を失った。

俺の人生エピソード（後書き）

普通に不幸な少年です。

オレの人生エピソード（前書き）

二人目の主人公

この二人が主役です。

オレの人生エピソード

オレはイタチを助けて死んだ。

オレの親友は主人公やった。

実際にはどうかかわからんが、なぜかモテモテやった。

ホンマになんでや？自分で言うのもなんやけど、オレ、結構イケメンやで？

まあ、多分ゲームでよく出てくる残念なイケメンポジションにオレはなっとる。

アイツといるとなぜかアホな行動ばっかやってまう。

・・・なんでやねん。マジで。

こんなオレにも好きな奴はおった。

むしろ積極的にアピールしたし、何度も好きやと言った。

でも彼女から返ってくる答えは

冗談か？

と流される。

拳句の果てには

『言葉に心がこもってない』

何処がや！？関西弁なんはしゃあないやろ！それでも本気やねん！そんな流され続ける日々が続いた。

ある日、オレが出かけているとアイツと彼女が二人で歩いていた。悪いと思いつつあとを着けると、彼女は顔を真っ赤にして

『好きだ。付き合ってくれ』

と言い出した。

アイツの答えは

『うん。喜んで』

やった。

軽!!!?

お前に惚れとる他の女たちはどうすんねん。

オレの片思いは何やってん。

接点多かったんはアイツを見たかったからか？

ホンマ、なんやねんな。オレは

翌日、鬱屈した気持ちで学校に向かうと一匹のイタチが道路を横切ろうとした。

おいおい、トラック迫ってきてるで？

気付かずに横断を続けるイタチ。

あーもう!!!

オレは走り出し、イタチを道路の外に投げて意識を失った。

オレの人生エピソード（後書き）

関西弁の主人公

俺と同じ匂いのやつと羽根付き美少女（前書き）

前世で脇役の二人が出会う

うくん。やっぱ駄文ですね。

どうしよう。空白の使い方がイマイチわかりません。
設定かなり強引です。

俺と同じ匂いのやつと羽根付き美少女

ふと目が覚めると俺は真っ白な場所にいた。
なんぞ？

周りを見渡してみる。

うん。なにもn・・同年代ぐらいの男がいた。
しかもイケメン。

イケメンに出会った時の俺の反応は基本二つ。

1、無視する

2、罵る

だがこのとき俺はなぜかこのイケメンから目が離せなくなった。

似てる

脳裏に浮かんだ言葉は俺の中から無限に出てきて口から漏れた。

「「似てる」」

ハモる。

目が合う。

瞬間、理解した。

このイケメンは俺と同じだ、と。

俺と同じ脇役。

つまりコイツは・・・残念なイケメンなのだ！

「友よ」

「おお、同士よ」

俺たちは握手をした。

手に触れただけでわかる。

コイツの今までの辛さ。虚しさ。悔しさが。

「俺の名前は、久城曜斗だ」

「オレの名前は風原千聖かざはらちさとや」

お互いに自己紹介をする。

そして俺は聞きたかったことを口に出す。

「今まで、どうだった？」

聞いた瞬間。

「最悪や」

と一言風原は、いや、もうこいつとはマブダチな気がするから千聖と呼ぼう。千聖は即答した。

「そっちは？」

千聖から質問を返される。

俺は一言簡潔に。

「最低だ」

そう答えたのだった。

俺たちはしばらくの間お互いについて語り続けた。

話せば話すほど俺と千聖は似ていて

似ていれば似ているほど俺たちは親近感が高まり続けた。

悲しいほどに俺たちは不幸だった。

千聖の好きな人へ告白する勇氣は単純に尊敬した。

本氣に取られない千聖が哀れすぎる。

話によるとやはり千聖は残念なイケメンだった。

「ホンマ、ありえへんであのアホ。なんでオレはアイツと親友に・・」

「だよな。しかもハーレム要員の俺を見る目が辛すぎて・・」

「オレの・・・」

「俺も・・・」

~~~~~3時間後~~~~~

「あの」

「でな、オレはアイツに言ってやったんや。周りを見てみいってな  
！」

「あゝ、俺、そのセリフ、アイツに言いたい言葉ベスト10に入っ  
てるわ」

「あの!!」

「「つつ!!?」」

突然の大声に俺たちは声の方に目をやった。  
そこには

羽の生えた少女、いや美少女がいた。

「盛り上がってるトコすいませんが」

何か言ってきたるが俺は無視して話を続ける。  
千聖<sup>心友</sup>との語らいはすごく楽しい。

「でさ〜」

「マジで?へー、オレは」

「あの、聞いてて哀れになるのでこちらの話きいてくれませんか?」

「「誰が哀れだコラァ!!」」

「ひい!」

哀れ?哀れだと?

ふざけるなよ。

今までの人生、哀れなんてチンケな言葉で言い表せるか!

「なんやねんお前さっきから」

「俺たちに何か?喧嘩売りに来たのか?」

「い、いえ・・・ただ少し話を」

目で通じ合う。(既に俺たちは簡単なテレパシーができる!・・・  
ような気がする)

どうする?

聞いてみてもええんちゃうか?

おーけー

俺は少し怯えている羽根付き美少女に先を促した。

「えーと、まず初めに。私はムーアといいます。そして貴方たちは  
二人とも既に死んでいます」

「「は?」」

死?

あれ?　そーいや俺、狐助けてそのまま・  
ん?　どうしたつけ?

「まず、カザハラチサトさん。あなたはイタチをトラックの前から  
離脱させたあと派手にはねとばされ、普通に即死。さらに吹っ飛ん  
だ死体にイタチが直撃して助けたイタチも死にました」

うわ。

無駄死じゃん。

千聖、お前・・・。

「次に、クジヨウヨートさん。あなたはキツネを離脱させたあと乗



用車に撥ねられ近くでゴミを収集していたゴミ収集車に巻き込まれ死亡。誰も気付くことなくそのまま工場に戻り発見されました。ちなみに助けたキツネですがゴミ箱に入ってしまったあなたとともにグチャグチャにかき回され死にました」

俺も普通に無駄死にじゃん。なにそれ？

助けたつもりがほぼ間を置くことなく死んでるけど。

「な、なんやねんそれ・・・」

「えーつとですね。それで実はこの二匹、神格保持の魂でして二匹ともあそこで死にかけてギリギリのところで動物から妖怪へ。そして神へと成る予定だったんです。それをあなたがたは二匹の邪魔をして殺した挙句、ほぼ間を空けずに死んだため魂が混ざり合っちゃって・・・」

邪魔って・・・。俺たちは無駄死どころか邪魔者扱いされるのか？

「それで？」

「えっと、簡単に言うとお二人とも、魂がそれぞれ神に限りなく近いキツネの妖怪とイタチの妖怪になっています」

はあ？

意味がわからん。てかどちらにせよ。

死んでから魂がそんなすごいことになっても意味ないか？

「ふーん。魂がねえ。それで？オレ達をどないするんや？」

「肉体を与えて異世界へ送ります」

「はあ！？なんでそうなんねや！？」

「ですからあ、既に動物から妖怪の過程は終えているんです」

「あー、成る程。あとのもう一つ、妖怪から神へ成れと？」

「はい」

「いいのか？つまりそれは俺たちに神に成れてことだぞ？」

「はい。もともと二匹とも人間への憎悪で悪神になっていたんです。でも神に成る運命？というかサダメみたいなのは変えられないので・・・それが貴方たちの性格なら悪神にはならないでしょうし」

悪神か・・・。

まあ、

「ならないなあ」「ならんなあ」

「だからサダメ？的なものを変えずに。このまま別世界で神に成ってください」

つまりこれは・・・。

「異世界トリップか？」

「まあ、簡単に言えばそうです」

「よし」

俺たちはまたも目で通じ合う。

行くだろう？

もちろんや

「任せろ！」

「ありがとうございます。とりあえず不老ですが不死ではないので  
なのでなんとか500年は生き延びてください」

「おう」「当たり前や」

「次に能力と新しい真名ですが・・・」

「真名？」

それはあれか？知られると逆らえなくなるとかいう・・・。

「いえ。別に関係ありません」

ないのか。

いや、あったところで嬉しくないけど。

「えー、では

クジヨウヨートさんは

真名…ヨーク

能力…幻術、炎術

カザハラチサトさんは

真名..チーコ  
能力..風術  
となります」

お　い

「「真名テキトーかよ!!」」

「では、頑張ってください。ふぁいとー」

「うお!?!」 「なんや!?!」

急に地面が無くなる。

気持ち悪い浮遊感とともに、俺は異世界へと想いを馳せていた。  
そう、俺は、いや俺たちは・・・  
目で通じ合う。

『ハーレムをつくる!!!』

**俺と同じ匂いのやつと羽根付き美少女（後書き）**

想像をこえるgggg感

いつか書き直したいです。

## オレと性転換と森箒り（前書き）

やっと思世界へ

しかし今回と次回は二人ともあまり動きません

## オレと性転換と森簞り

「そろそろ起きろ相棒」

そんな声で目が覚めた。

オレは倒れとるみたいなので状態を起こして声が聞こえた方を見る。  
金髪美女がいた。

「お、おおう？ 誰・・・ですか？」

金髪美女は肩を落とし溜め息をついてから

「曜斗だ。まあ別名ヨーコだけど。忘れたのか？ ほら、俺たちは異世界トリップしたんだよ」

ヨーコ？

異世界トリップ？

「おお、なるほど。夢やなかったんか」

あらためて周りを見渡すとどうやらここは森の中らしい。

樹齢が数千ぐらいの大樹があったのでオレはここが日本ではなく異世界だと断定することにした。

「で、相棒ってなんや？」

「いやか？」

「やー、いややないけど。正直、自分みたいな美女に相棒なんて言われると・・・照れるわ」

「アホか！」

イヤでもホンマにヤバイ。

中身が相棒やと知ってても惚れそうや。

滑らかで輝いているうえ腰まである金髪。

その上の方にある三角で少し尖ってるキツネの耳。  
海に似た深い蒼の瞳。

異世界の醍醐味である人外美人が今ここに！

「なあ、付き合って」

ゴス！

「ごはあ！」

瞬間、踵落としを脳天に喰らった。

座ってたから普通に足が届いた。

でも

「着物で・・・踵落としは・・・ご褒美やろ・・・」

そう！！

相棒の服は白の着物に紅の帯というものやった。

そこから見えた

「想像すんなボケ」



「うん。スマン」

クッ！

相棒に欲情するとは・・・。

オレはなんて馬鹿なんや。

「まあ、俺もお前の寝込みを何度か襲いかけたが・・・」

「コワ!!」

~~~~~閑話休題~~~~~

「で、どうやらここは森の中っぽいな」

「見たらわかるやろそんなん」

「だな」

さて、オレと相棒の目的は

ハーレム!!

やけど

「女の子おらんし、街行かへん？」

「落ち着け！」

失礼な！

落ち着いとるわ。

落ち着いて女の子探そうとしとる。

「焦るなよ。俺たちには馬鹿ほど時間があるんだし。それに、お前が寝てる間に試してみただけど……。やっぱ俺たちは主人公じゃない」

はあ？なにを当たり前のことを。

それがなんやねん。

「まあ、聞いてくれよ」

説明中

どうやら相棒はオレが寝とる間に能力について試したらしい。

異世界トリップの醍醐味はハーレムと

おれ T U E e e e e e e e e e e e e e e e e
e e e e

になれること。

相棒もワクワクしながら能力である炎術を使おうとしたらしい。

「え？ やり方わかんなくね？」

と最初に気づき、どうにかこうにか自分の中から妖力（魔力じゃない）のは自分たちがあくまで妖怪であることを覚えとくためらしい）

性奴隷Endて。

まあ、今はお互い美女やしなあ。

ちなみにオレは

茶色の首元までの髪で丸まっとるイタチ耳、黒の目と、あまり異世界カラーじゃなかった。

まあ、顔は生意気そうな美少女やったけど。

チッ！

自分にトキメクとはな・・・。

「だから俺は力がある程度つくまでここに籠るべきだと思う。幸い、ここの獣？つーか魔物はあるまり強くなかったし」

なんでも、角の生えたウサギがいて普通に倒せたことからここは『始まりの森』的な感じらしい。

「なるほどなあ。ここに籠ることは納得や。でもなんで別れなあかんねん」

別に一緒でもええやん？

「おい、俺たちは前世でなんだった？」

相棒は急に真顔になると聞いてきた。

前世やと？

そんなもん

「脇役。しかもモテない」

ただの脇役でもない。

モテへん脇役や!!
クソ!!!!

「そんな俺たちが、相棒と自分を呼んでくれる美女と一緒に生活する」

「あ」

あ、納得。

「（スウウウウ）惚れてまうやろおおおおおおお!!」
「!!」

心友（相棒）は息を目一杯吸い込み、関西弁で叫んだ。
うん。

納得の理由や。

確かに惚れてまう。

オレなら多分二日で惚れる。

「俺たちはハーレムをつくり異世界に来んだ!!身内同士、しかも男同士で好き合うなんて馬鹿か!!」

「あれ?やけどオレら男になれるんか?」

「妖怪と言えば人化だろ。俺たちは獣人じゃない。妖怪だ。しかも神に近い妖怪だ。男にぐらいなれる!!・・・と思う」

「おお!せやったな。なら能力を磨きつつ男に化ける方法も探していこか」

「ああ。ならこの樹齡がヤバイ大樹からこっちが俺。そっちがお前で」

「りょーかいや。期間は？」

「二年」

そこまでサクサク進めるとオレ達はお互いをみて

「またな」

「おう」

別れた。

後から聞いた話によると
この森、めっちゃ強い魔物ばっかで通称『終末の森』って言うらしい。

オレと性転換と森箆り（後書き）

次回、キツネの方の主人公の修行シーン
短めになる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4444ba/>

キツネとイタチのハーレムルート

2012年1月13日01時51分発行